福井県文書館講演

「公議」運動における福井の役割

－横井小楠を通じて－

三谷　博*

はじめに
１.「公議」運動の開始
２．横井小楠の招聘
３．松平春嶽の幕権掌握
４．京都の困難・王政復古への飛躍
その後

はじめに

懇切なご紹介をいただきまして、ありがとうございました。５月[1] に続いてもう一度福井を訪ねてお話できるということで、大変光栄に存じております。

私は、福井の歴史についてあまり知りません。福井の歴史については、地元の方々が非常に精細な研究をなさっています。そういう地元の方々がいらっしゃる中で、私がお話しできることは何かというと、私は日本全体から見た明治維新、あるいは世界の中での明治維新というものに関心があります。ですので、中央政局の側から福井を眺めたらどう見えるか。今日は、そういうお話ができるかと思って参りました。

さて、明治維新というのは、普通は長州を中心とした尊王攘夷運動が主な動きであり、それが討幕運動に変化して王政復古が行われたという筋書きで語られるのですけれども、当時の史料を見てみますと、福井の果たした役割というのは非常に大きい。

福井が最初に提唱した「公議」「公論」という課題があります。それが日本の政界に共有されて、一つの巨大な潮流になり、「公議」の潮流と「尊王」の潮流が合わさったところで明治維新が実現しました。また、結果を見ると、明治維新は世界の革命の中で非常に犠牲者が少ないものでした。約３万人です。いま３万人と聞くと非常に多いと感ずるかと思いますけれども、例えば明治維新に先行するフランス革命では、対外戦争を含めて約155万人が犠牲になっています。また20世紀になりますと、中国革命にしてもロシア革命にしても1000万、2000万、あるいはそれ以上が犠牲になっています。明治維新は、武士がいなくなる、世襲の貴族がごくわずかになるという、世界の中で最も大きな革命の一つだったのですけれども、それがたった約３万人という犠牲で行われたというのは、非常に不思議

＊跡見学園女子大学教授、東京大学名誉教授

なことです。なぜそういうことができたのかがわかると、現在や未来の人類がこれから先、社会を大胆に改革しなくてはいけないと思った時に、どうやったら犠牲を少なくしてできるか。そのヒントになると思います。維新が尊攘運動だけだったら、もっと犠牲は大きくなっていたはずです。そこで「公議」運動の果たした役割は非常に大きかったと考えられる。それをお話ししたいと思います。

それでは本論に入ります。今日の講演は、「日本の中央政局の側から幕末の福井を視る」ということで進めていきます。明治維新とはなんぞや、何が変わったのかというと、おおよそ三つあります。第一は、集権化が行われた。江戸時代の日本には、国家という組織が二百数十もあったのですが、それがたった一つになった。そして君主も二人いたのですが、天皇一人になった。これが王政復古ですね。それから大名の国家を廃止して国を一つにした。廃藩ですね。この王政復古と廃藩とをあわせて集権化が行われた。第二は、「公議」ということが提唱された。そしてそれが、最終的には明治23年（1890）に国会が開設されて立憲君主制に移行する。現在のリベラル・デモクラシーにつながる大きな長い動きであり、それは、明治維新では最初から、幕末の時代から課題になっていた。第三は、江戸時代を支配していた世襲的な身分制が、ほぼ廃止された。武士身分を廃止する一方、「穢多（えた）非人」と呼ばれていた被差別身分も廃止して、平民に統合した。ごく一部、大名と公卿、それから皇族、約四百家あまりは、皇族・華族という新しい身分がつくられて残りましたけれども、そういった家を除けば、日本列島に生まれて育った人は、男性に限ってのことではありますが、みな同じ扱いを受けることになりました。この第三の脱身分化があったから、明治維新は大きな革命だったといえるのです。

そうした変革の中で、福井の「公議」運動は重要な役割を果たしました。福井はその運動の主役だったのです。これは尊攘運動とは別系統の運動で、いままでの維新史ではほとんど注目されていなかった。これは非常にまずいことだと考えています。では、その福井の「公議」運動の目標は何だったかといいますと、まずは大大名が中央の政権に参加するということです。それまで徳川とその一門だけで決めてきたことを、日本全体の意思を総合して決める。いわゆる挙国一致体制をつくるということで、それはおのずから、集権化への道もつけることになりました。それからもう一つ、この「公議」運動は、人々を説得する、粘り強く交渉するという方法をとり、決して暴力、あるいは暴力を背後においた威嚇を使うということはなかった。これが福井の「公議」運動の重要な特徴です。尊攘運動の場合は逆でして、「攘夷」という言葉にありますように、外国との戦争を故意に引き起こす。これが水戸にはじまった尊攘運動の重要な特徴でした。もちろん政治運動ですから、彼らは口を使って人々を説得してまわることもやります。つまり、尊攘運動の場合は、暴力と「公論」との両方を同時に同じ人が使う。それに対して、福井ではじまった「公議」運動というのは、平和的手段だけで追求されました。その結果、先ほど申し上げたように、明治維新での犠牲者はかなり少なくてすんだ。どうしてそうなったのかということを簡単に説明するのは、なかなか難しいのですが、その過程を詳しく知りたいという方がいらっしゃれば、私の『維新史再考』[2] という本に細かく書いてあります。こうやったら犠牲は少なくてすみますよ、と一般論を簡単には語れないのですけれども、具体的にこうやったから実際に犠牲が少なくてすんだんだな、ということはわかると思います。

それから、福井は脱身分化にも貢献しています。橋本左内が安政４年（1857）に友人の村田氏寿（うじひさ）に宛てて書いた手紙を読みますと、左内は、大名領国制、私の言葉でいいますと「双頭・連邦国家」[3]

という、江戸時代の国政の大枠は変えようと考えてはいない。しかし、徳川幕府に人材を集中する、大名のレベルでも、それから大名の家臣、さらに庶民のレベルでも、有能な人を幕府の高官に抜擢するという格好で、身分差を漸進的になくしていくことを提案しています。それを横井小楠も引き継ぎ、藩内でも三岡八郎（由利公正）などにも受け継がれます。さらに幕府では勝海舟も共感を持ち、のち明治の初め、坂本龍馬たちを介して「政体」という文書に書き込まれます。「政体」は明治政府がつくった最初の憲法、国家基本法です。明治政府ができて約５か月後に公布されたもので、政府の官僚を九等官、九つのレベルに分け、その一番上は皇族とか公卿とか大名にとってあるのですけれども、その下の二等官以下は「藩士・庶人」、大名の家来でも庶民でも登用できると規定していて、それが実行されます。例えば渋沢栄一なんていう人は元々庶民ですけれども、いまでいう財務省の中心人物になって非常に重要な改革を連発します。

次に、幕末政治史とはどういうものか。しばしば水戸、薩摩、それから長州といった大名を中心において、最初から彼らが主役だったというふうに書かれることが多いのですけれど、それは事実として間違いでして、時期によって主役は変わっていきました。

ペリーが来てから安政五年政変[4] が起きるまで、日本は国内的な平和が維持されていました。その時に政界の中心にいたのは徳川将軍家であり、将軍家と協力しながら同時に対抗関係を持ったのが水戸徳川家でした。安政五年政変が起きた時、その中心に立ったのは他ならぬ福井です。そして福井と深い提携関係に入ったのが薩摩でした。それから幕末最後の年にいたるまで彼ら越・薩が「公議」運動の主役を演じていくことになるのです。それに対して別の筋で動いたのが水戸徳川家であり、さらにそれを引き継いだのが長州でした。文久３年（1863）という年に一旦、長州が京都から追い払われて尊攘運動は下火になりかけますが、その運動はそこで終わらずに、大きな変化が生じます。この時、徳川に対して弓を引いた長州、それに対抗する薩摩という構図ができて、薩・長が主役になる。ただ、薩摩は依然として福井と提携を続けている。そういう関係になります。慶応２年（1866）に長州戦争で幕府側が事実上負けてしまったあと、今度はどうなったかというと、それまでは薩・越連合が中心で、それに長州が対抗している図式だったのですけれども、それが幕末最後の年に激変を起こす。今度は土佐が主役に躍り出ます。いわゆる大政奉還をした上で、王政復古を徳川を中心にやろうという主張で、それを福井が補佐することになります。その逆の極端は徳川を排除しようというグループでして、長州は元々そうだったんですが、薩摩はこれに荷担するか否かで内部が揺れる。大政奉還から王政復古までの間、薩摩は長州と一緒に挙兵をするか、それとも土佐と組んで平和的に政権移行をやるかということで揺れるんですね。薩摩はまず土・越のグループと一緒に王政復古クーデターをやります。王政復古クーデターの時は土佐と福井、それから尾張が多数派でした。九門を固める五つの大名のうち、三つは親徳川の大名です。中間に芸州がいますが、これは両方から相手にされなかった。つまり、徳川を排除しようと考えていたのは薩摩だけだったのです。その王政復古クーデターが成功したものですから、議論の末に、徳川慶喜は議定として新政府に入る、政府のトップに返り咲くということが決まりました。ところが、それが突然ひっくり返る。江戸で庄内藩が薩摩の屋敷を襲ったことをきっかけに、幕臣たちが怒りはじめ、大坂にやってきて、京都に攻め上った。こうして戦争がはじまったら、勝ったのは薩摩と長州だった。そこから彼らの主導権が確立していく。というわけで、

幕末最後の年は複雑すぎて今日はお話する時間がありませんけれども、福井は一貫して「公議」運動の主役であった。最初は自分が中心で、後半になってくると中心が薩摩に移るけれども、一貫してこの連合が幕末政界の中枢にいたのだということを頭において、これからのお話を聞いていただければと思います。

１．「公議」運動の開始

Ａ．一橋慶喜の擁立運動（安政４・５年）

さて、「公議」運動の開始をおさえていきます。松平慶永は、安政４年（1857）から一橋慶喜を将軍の跡継ぎにしようと擁立運動をはじめました。この時に提携した相手が水戸、そして薩摩でした。それに徳島の阿波蜂須賀家、その殿様は徳川宗家の親族です。それから九州の柳川立花家、さらに外様の土佐とか宇和島も引っ張り込む。そういう形で擁立運動をはじめて、将軍家定の御台所（みだいどころ）になった篤姫を通じて将軍に働きかけようとします。西郷は城山（しろやま）で戦死した時に左内からもらった手紙を鞄の中に入れていたということですが、この時、福井を代表する左内と薩摩から呼び出された西郷とが組んで、大奥への工作をやりました。

Ｂ．橋本左内の政体改革構想

さて、どうして一橋慶喜の擁立運動をやったのかということなのですが、それは、この有能な人を将軍の後釜に据えて、彼の手で大規模な改革をやろうとした。つまり、主眼は政体改革のほうにあったのです。その改革の構想ですけれども、左内は大名領国制、つまり「双頭・連邦」の体制は変えようとはしない。しかし、このままだと西洋からかかっている圧力に対処することはできない、日本はばらばらになりかねない。だから、中央政府である幕府の機能強化を図らなきゃいけないといっています。ここまでだったら誰も反対しません。

機能強化の骨子は二つあります。第一の柱は、大きな大名が幕閣に参加すること。具体的には水戸の徳川斉昭（なりあき）、福井の慶永、薩摩の島津斉彬（なりあきら）、それから肥前の鍋島斉正（なりまさ）です。それまでの幕閣というのは、小さいか中くらいの大名しかなれないという慣行があって、小さければ、実は外様でも老中になったことがあります。逆に大きな大名は親藩・外様ともに不可能でした。例外は大老で、井伊家とか酒井家とかありますが、大老には実権がない。老中には権力がありますけど、大老にはない。お飾りでした。ここで名前が挙がった人たちは、個人的に有能で、海防についても前から調査し、準備もはじめていた人々で、この人たちを中央に集めてしまえば、かなりのパワーが中央の政権に集中できるだろうという考えでした。それと、逆に放っておくと、この人たちは何をやり出すかわからない、離反するかもしれない、だから仲間に引っ張り込んでおこうということ。そういう意図もあったんだろうと思います。それから第二の柱は、彼らを支える官僚として、大名の家臣と牢人を入れる。旗本だけではなくて、他の人たちも入れる。牢人といったって、先祖が侍だったという家系図を持っているだけの話で、本当かどうかわからない。庶民といっていいと思います。ともかく、生まれた身分に関係なく、生まれた土地も関係なく、有能な人が見つかったら幕府で使ってやりましょうと考えました。この時、彼は京都の朝廷は勘定に入れていなかったのですが、３か月後に京都にお使いをしてお

公家さんと話をした時、この人たちはあまり信用できないけれども、引っ張り込むと政体改革のために使えるかもしれないと思いつき、朝廷を組み込むことも考えはじめました。最初、彼の頭には王政復古という考えはなかったのです。それがすぐ変わる。これをいま遠くから眺めますと、彼は当時の日本で唯一、政体再編成の構想を考えていた存在といっていいと思います。人材登用とか細かい話だったらみんなああだこうだといったりしていますけれど、それをシステムとして考えたのは彼が最初です。また、徳川に権力を集中するため人材を集中すると、結果的に世襲身分制自体が骨抜きになる。その先鞭をつけたというふうにもいえると思います。

小楠との関係でいいますと、彼はちょうど京都から江戸に帰る直前に、京都で小楠と会って話をしています。小楠が福井に初めてやってくる途中です。詳しいことは史料に残っていないんですが、どうも、小楠の側には非常に共感する部分と強い違和感を持つ部分があったようです。このことはあとでお話しします。

C．挫折時の対応

しかし、この一橋慶喜擁立運動は失敗してしまって、水戸の斉昭、尾張の徳川慶勝（よしかつ）、福井の慶永、みんな強制的に隠居させられて幽閉処分になってしまいました。政界から排除されてしまったんですね。土佐の山内容堂も隠居させられて慎（つつしみ）に処された。宇和島の伊達宗城（むねなり）は井伊家と関係が深かったせいでしょうか、もう少し穏やかな処分で、隠居するなら辱しめは与えないということでしたが、実際は強制的に隠居させられた。斉彬は病死して処罰を受けていません。何れにしても、一橋慶喜擁立運動を一生懸命やった大名たちが相当にひどい目にあわされたわけですが、ここで１つだけ加えると、よく一橋慶喜擁立運動を妨害した井伊大老はけしからんという解釈がされますが、大老の立場からすればそうせざるを得ない理由があったわけで、悪意でやったことじゃありません。彼が家臣の長野義言（よしとき）という人の誤解、条約勅許がうまくゆかないのは「水戸徳川斉昭の陰謀」のせいだという説を信じ込んでしまったために、間違った判断をした。それは確かです。だけれど大老に最初から悪意があった訳ではないということは、申し上げておきます。

福井に戻ります。処罰された福井はどうしたか。ここに重要な分かれ目がありました。水戸や薩摩の家臣の一部は、まず京都に働きかけ、その後は暴力を使ってでも井伊大老を退け、そしてあわよくば一橋慶喜を将軍の後釜に据え換えようと考えて、果敢な行動に打って出ます。それに対して福井の家臣は、そういった反抗運動を抑制したように見えます。幹部の中には、謹慎をしたり、辞職をしたりする人が出てきて、春嶽の側近の中根雪江（せっこう）もそういう一人でした。一部には、三岡八郎みたいに薩摩の一部と提携して井伊大老を襲うなんてことを考えていた人もいたようです。しかし、これは三岡本人がのちに回想でいっていることで、藩としては、幕府の処分にしたがうという態度をとりました。こういう場合、大抵の大名は、大失敗をやったとなるとその時の幹部に責任をとらせて、別の家臣が権力の座につく、危ないことをやった人を退けるのですが、この時の福井はそうしなかった。むしろ、福井は正しいことをやった、徳川宗家のためになることをやったのに、間違って処罰されてしまった、だから、いつかこの冤罪をそそがなきゃいけない。そういう人が多数派だったようです。対立もあることはあるけれども、厳しい域には至りませんでした。これがもし、一方は幕府の将軍に全面的にし

たがう、もう一方は正しいことをしたのだから幕府に認められるまで反抗する、そういう二つにわかれてしまうと何が起きるか。水戸と同じことが起きたはずです。水戸では何度も何度もこういった争いが起きて、敦賀で天狗党350人がいっぺんに殺されてしまうなんていう凄惨なことが起きますけれども、福井にしても薩摩にしても、似たような党派争いが起きても、水戸のようになってはいけないというブレーキが最初からかかっていた。それがよかったんだろうと思います。

それからもう一つ、藩の政策関心を中央政界の権力の再編成の問題から富国策、藩をどうやって富ますか、藩の経済をどうするかというほうに転換させたんですね。国に帰された三岡も、制産方という組織をつくってその中で重要な役割を果たします。私は三岡という人をそう知っているわけじゃありませんが、とても元気で、元気すぎて暇だったら何やるかわからない。でも、おもしろい仕事をやらせると一生懸命やるから、そっちのほうで無難にやってもらおう。そういう配慮も効いたのだろうと思います。

それから、たまたまこの年に福井に来ていた小楠が、水戸色を除去するために有効なアドバイスを与えています。鈴木主税（ちから）の手でつくられた明道館では、家臣たちに対して就学を強制していて、月のうち半分以上学校に通わなきゃいけないと決めており、経済面でも藩全体として極端な節倹が行われていたようです。小楠はそれはやめたほうがいいといっています。例えば「一体之仕懸け、水府抔より参り、何事も一ト息に取り懸り、急迫に相成、人心不処合に御座候」[5]、正しいと思い込んで一気に突き進むと、人々が戸惑ったり、困ったりしても、それを無視して断行してしまう。そうなったらまずいと。これは福井に着いた直後に熊本の親戚に書き送った手紙の一部です。鈴木と左内は水戸を非常に尊敬していて、明道館も弘道館そっくりです。左内の色があるとすれば、それは蘭学を学校の中に取り込んだというくらいのことです。

それじゃあなぜ、小楠はこうした水戸風がだめだというのか。弘道館を中心にして「学政一致」、学問と政治を一致させる政体をつくるというのが水戸の理想です。福井もそれを真似ようとしていました。小楠には招聘の話が二度ありました。その一度目の招聘のあとに『学校問答書』[6] という意見書を書いて、藩に献呈しています。「和漢古今、明君出給ひては必先学校を興し玉ふことにて候。然るに其跡に就て見候に、学校にて出類の人才出候ためし無之」、日本であろうと中国であろうと、明君というのはまず、学校を興そうとする。しかし、これまで学校から抜群の人材が出てきたという実績はない。意図と結果が全然対応してないといっています。どうしてそうなるかというと「学政一致と申す心は人才を生育し、政事の有用に用ひんとの心にて候。（中略）諸生何も有用の人才にならんと競立、着実為己の本を忘れ、政事運用の末に馳込」、学問と政治を一致させようと図ると、みんな自分はどれほど有能かを人に見せるための学問をやってしまう。『論語』の言葉ですが学問は「着実、己の為めにす」、自分を鍛えて立派な人間になる、この己のためという学問の基本を横において、自分はどれほど頭がいいかを人に見せることに関心が集中してしまう。そうすると何が起きるかというと、学生同士で競争が起きて、さらに喧嘩をはじめる。これは小楠が熊本の藩校で経験したことで、彼も喧嘩をやった当事者です。多分、ここには自分の反省も入っているんだと思います。学校をつくっても理想通りに立派な政治家が出てくることはなく、むしろ逆になることが多いという。

小楠自身も相当難しい人だったようですけれども、自分の反省や経験をもとにして、福井で同じこ

とを起こさせないために、長い時間をかけて、何が政治家にとって、あるいは人間にとって大事かということを納得してもらうという基本から仕事をはじめました。そして、すぐに藩内抗争を回避しないといけないと気づいて努力するわけです。安政３年（1856）４月のことですが、水戸の斉昭がかつて重用した結城寅寿（とらじゅ）という人を処刑しました。これが周辺にすごいショックを与え、幕府も大名もみんな徳川斉昭はどうしたのだと驚いた。この時から斉昭は世間から見放されることになります。これはどうして起きたのか、実はそれを示す史料が、宇和島で「明治維新学会」があった時に発表で使われた宇和島の史料の中にありました[7]。それを見てみると、なんと斉昭自身が、ある商人の名前をかたって寅寿をはめて、それを口実に殺していた。非常にえげつないことをやっていた。表の史料にはほとんど出てこないのですけれども、多分噂では伝わったんでしょう。以後は多くの大名家の人々が、水戸の真似をしてはいけないと考えるようになりました。それでも、「正義党」がいて「奸（かん）党」、つまり邪（よこし）まな党がいる、自分は「正義党」なんだからあっちは「奸党」だといって徹底的に叩く。そういう水戸風の発想はその後も残り、一般にはむしろ優勢になっていきました。

これが、安政五年政変以後、日本の国内で政争が拡大する重要な要因になるのですけれども、福井では、幸いなことに小楠が先回りして、政争の拡大を防止するように行動してくれました。「東北行違い」、「東」は江戸、「北」は福井です。江戸で謹慎している春嶽とその側近の中根、それと国元の重臣、家老の本多飛騨や松平主馬（しゅめ）たちとの間で、発想の違いが軋轢を生んで江戸と国元で対立が起きかけた。これをなんとかしないといけない。万延元年（1860）に、春嶽の次の藩主の松平茂昭（もちあき）が御国入りをした時に何とか弥縫（びほう）に努めたのですが、それは十分でなかった。そこで９月になって春嶽が幕府から部分的に宥免された時に国元がこういう人事をやりたいという案を江戸に送ったら、それを春嶽が拒否して大騒動になった。その時、10月15日に小楠の役宅に国元の家老たちが集まって、激論を交わしました。激論を交わしたんですが、これは小楠という人にしかできないことでしょう、むしろ激論を交わしたことによって、藩内が融和することになります。国元の家老たちは、小楠と議論をしたあげく最後は涙を流して、申し訳なかった、正しい主君に一生懸命仕えますと約束して、その後は大きな争いが起きなくなりました。この成行きは珍しいことで、私も驚きました。

それから文久の初めになりまして、中根は側用人に復帰し、対立の当事者だった三岡はそれまでの低い地位から奉行見習というもっと高い地位に引き上げられて、人事の面でも和解が表現されました。その後、文久３年（1863）夏に激烈な対立が起きるまで、福井は凪の状態が続きます。

２．横井小楠の招聘

Ａ．横井小楠の「実学」

次は小楠の話に移ります。横井小楠という人は熊本の儒者でした。中級の武士の家の次男に生まれて、藩校の時習館で学び、そこの居寮長（きょりょうちょう）というのを務めましたが、何か失敗をやったのか、それをそらす意味もあって、江戸に遊学しました。その江戸でもまた失敗をやって、どうもお酒を飲みすぎて暴れたとかで、これじゃあ勉学を続けさせるわけにはいかないということで、国元に帰って謹慎させられることになりました。何度も失敗をやった人ですが、その都度、発想の仕方が変わっていきます。

最初は熊本の藩校が奉じていた山崎闇斎（あんさい）の闇斎学派だっのですが、朱子学一辺倒に変わります。そ

れからさらに朱子学を捨てて『書経』に直接つく。四書五経の「経」、一番古い経典の一つに戻って、堯、舜、それから、その後の夏、殷、周という三つの王朝、中国史上理想とみなされた時代の政治を模範にして物事を考えるというふうに変わっていきました。いわば時代をどんどん遡っていく。これも一種の復古です。時代を遡りながら新しいことをやるというのが、近代以前の特徴でした。西洋から啓蒙思想が入ってくると未来を信ずるように変わりますが、それ以前はどこの世界でも、古い時代に遡ることで大胆な改革をやったのです。

小楠は、家老だった長岡監物（けんもつ）、役人だった下津九馬（きゅうま）や荻昌国、それから若い元田永孚（ながざね）、そういった人たちと『近思録』という朱子学の入門書を読む勉強会をはじめました。これは、外からは変なことをやる怪しげな奴らだということで「実学」『党』というふうに呼ばれました。「党」というのは、江戸時代には悪い言葉です。しかし、本人たちは実学、本当の学問をやっているのだと主張しました。われわれは「実学」といいますと「実用的な学問」と現代的に理解しますが、そうではありません。真の学問です。孔子をはじめとする聖人たちが教えた真の学問を再発見して、彼らにならって自らを鍛えていく。これが「実学」というものでした。朱子学は、人はすべて努力しさえすれば聖人になれるという教えなので、それを目標に一生懸命努力したのです。

小楠の特徴は、その心構えにあります。当時は「心術」といいましたが、その心構えを工夫することと現実の政治とを直結させる。間に何もはさまない。有名な思想家や政治家、先人たちを間にはさまないで、いきなり聖人と直結して現在の問題を考える。そして、人々の役にたつもの、「利用・厚生」を大事にして、「智術・高名」を否定します。どれほど経典に詳しいか、難しい字を知っているかなどということはどうでもいい。そんなのは馬鹿のやることだと否定します。頭のいい人はいろんなトリックが考えられるので、トリックを使って人を操縦するのがうまい。それではだめだというのです。「心術」を鍛えねばならない。それを達成する方法が「講習・討論」というものです。一人で考えているのではだめで、仲間をつくってお互いに批判し合う。経典を前にしてああだこうだと議論する。そういう「講習・討論」を通じて切磋琢磨する。この「講習・討論」というのは、民主主義の場合でも非常に重要なことでして、いまだったら「熟慮」という言い方をされることがあります。民主主義の国の主体は国民です。国民が支配されると同時に支配する側でもある。国民の主体性というものが大事なのですが、大きな国では直接民主制はできないので、代表を選ぶ選挙をします。そこでよく忘れられがちなのが、この「講習・討論」です。人々がいろんな意見を出して、それを議論して、納得ずくで物事を決めていく。このプロセスが大事なんですが、時々これが忘れられてしまいます。幕末に戻ると、まずは自分の国の君主、この場合は藩主ですね。藩主を聖人にする。そして一国が立派になったら、今度はそれを日本全体に広げていく。こういう手順で改革を考えていました。

B．福井への招聘

次は、彼がなぜ福井に来たかという話です。福井には吉田東篁（とうこう）という立派な闇斎学派の学者がいたのですけれども、藩は明道館をつくる時にもっと立派な人を招かなければいけないと考えたようです。それで熊本に使者を送りました。これが１回目の招聘です。この招聘は失敗したのですけれども、そのあとで、小楠は自ら他国遊歴に出かけました。尾張に行って親戚に会ったり、加賀に行ったりして

いますが、この時に福井にも実情を把握するためにやってきています。そのあとに提出したのが、先ほどご紹介した『学校問答書』です。しかし、できあがった明道館は、これも先ほどお話しした通り、鈴木や左内の構想によるもので、水戸の弘道館にそっくりでした。それにもかかわらず、小楠は招聘されることになりました。この２回目の招聘の使者が、村田氏寿でした。幕末の福井を語る時に彼を抜きにしては語れません。彼がつくってくれた『続再夢紀事』[8] という本があるから、幕末の福井の歴史はよくわかるのです。村田は、知識人としても官僚としてもとても有能だったようで、この時も『関西巡回記』[9] という記録を残しています。そこには、熊本に行った時に小楠が語った言葉が記されています。「道は天地の道なり。我国の、外国のと云事はない。」、「道」というものは、宇宙を貫く原理で、人間なら誰だって、われわれも皆、体の中に持っている。だから我が国の道が正しくて外国の道は間違いだなんていうことはないと、「道」の普遍性を断言しています。これは朱子学者として当たり前のことです。しかし「爰で日本に仁義の大道を起さにば(ママ)成らず。強国に為るではならぬ。強あれば必弱あり。此道を明にして世界の世話やきに為らにば(ママ)ならぬ。一発に壱萬も弐萬も戦死すると云様成事は、必止めさせにば(ママ)ならぬ」。強国になることを目的にして、国際政治の世界に打って出るというのではいけない。人間が普遍的にしたがうべき「道」というものを明らかにして、「世界の世話やき」にならねばならない。つまり、現在なら積極平和主義といわれそうな考えですが、中身は全然違っていて、この場合は軍隊を出して世界を平和にするというのではない。そうではなくて、争っている人がいればそこに出かけて行って争いを止めさせる、和解させる。小楠がいう「世界の世話やき」とはそういうことです。小楠もやはり、武力や暴力を使うことを否定しています。

C．『国是三論』

さて、『国是三論』[10] です。小楠は何度も熊本に帰りましたが、３回目に福井に来た時に先ほどお話しした藩内での激論があって、それを和解に導いています。いろんな人と議論をした、ちょうどその頃、小楠はこの『国是三論』という三か条からなる議論をたてました。「国是」は基本方針です。福井として目指すべき基本方針で、翌年の正月にはこの『国是三論』が福井の「国是」として正式に採用されています。討論したというのですが、誰とやったのかよくわかりません。多くの人と議論するのが彼の流儀ですので、中根とか三岡といった人たちも入っていたはずです。

三論というように「富国論」、「強兵論」、「士道論」と三つあります。富国論が頭にくるというのが非常に面白い。普通だったら、この時代ですと西洋の脅威が強調されて強兵論が先にくる。あるいは観念的な人だったら、士道論しかいわない場合もある。ところが富国論が最初にくる。これが大きな特徴です。そして人類に普遍的な「交易」を通じて、人々が安楽に暮らせるようにする政治、「仁政」を実現する。これがその主眼です。それでは、どうやるかというと、官民合同で藩営交易をやる。そして、上がった利益は民と共有する。具体的には、藩札相当のものを出して、それで領内の人々がつくったものを買い集めて、それを藩外に持って行き、そこで売って利益を得、それを藩内に還元する。そういう方策です。この時に藩外のことを「外国」といっています。世界の外国ではなくて、日本の中の他の藩です。それを「外国」と呼んで、藩外から利益を吸いとってそれを藩内に還元していく。藩札そのものは紙切れですけれど、それが利益を生み出す。証券を使って藩外から金銀を得たな

らば、それが裏付けになって藩札をもっと発行することができるし、値崩れすることもない。これはおそらく三岡、あるいは長谷部甚平、経済官僚たちと議論した上で、こういうアイデアを書いているのだろうと思います。実際に横浜や長崎といった開港地に外国貿易のための支所をおき、国内交易についても下関や敦賀といった交易の拠点に支所をおいています。

この富国策には、特徴が幾つかあります。それまで福井藩の中で行われていた経済政策というのは、節約一辺倒でした。それを真っ向から否定して、逆にたくさんものをつくり、たくさん売り買いし、儲けたお金をふんだんに使う。消費を盛んにする。いま積極主義と呼ばれるような方針を打ち出しています。当面はうまく回ったようですけれども、これに対しては自分の身丈（みのたけ）以上に消費する癖がつくとか、放縦に陥る、つまり遊興が目的になってしまうとか、結局は奢侈（しゃし）の風を生むということになり、のちに批判もされました。それでも、確かに藩内の経済は豊かになり、人心は和らいだようです。

それから、学問の見地からこの富国策を見てみますと、富国策というものは朱子学にはないものなので、典拠はずっと古代まで、先ほどお話しした『書経』まで遡るしかない。『書経』というものを原典にして、それを読み替えながら制度をつくっていきました。

政治的にも重要な特徴があります。そこでは「開国」という言葉がキーワードになります。「鎖国」というと、日本が世界に対して国を閉じているという意味で使われますが、小楠から見るとそれどころではない。幕府も大名も全部鎖国している。二百数十個の細胞があって、その一つひとつの間に壁がある。これは「私」である。壁を全部とっぱらって、「私」をやめて、交易というものを通じて、日本が一つの国、「公」にならなくてはいけない。そういう発想です。一流の学者でないとこういう発想はでて来ないでしょう。いかにも学者らしい、ラディカルな主張です。

それからもう一つ、富国論の論法自体、あるいは『国是三論』の論法自体、非常に不思議な構造を持っています。まず、誰かが問いを出してそれに小楠が答えるというスタイル、問答体で書かれている。そして、その問いは、例えば、鎖国はいいのだろうか。続けるのがいいのだろうか、それとも開国したほうがいいんだろうか、交易をしたほうがいいんだろうか。そういう誰もが考えるような質問です。ところがその答え、これが普通と違う。小楠は開国論者です。普通の開国論者だったら、鎖国は間違いで交易したほうがよいと答えるはずです。自分の都合の悪いことを批判し、自分の都合のいいことを肯定する。小楠はそうではありません。両方とも間違っているという。鎖国にはこんな害がある。交易にもこんな害がある。これが小楠の答えです。これを聞いた人は必ずびっくりすることでしょう。そりゃない、それは変だといぶかる。しかし、こんな答えを聞いた人は、考えはじめる。固定観念というものを壊すには、この論法が非常に効くのです。ですから、多分「東北行違い」の対立を和解に導いた時も、小楠はこういう論法を使ったのではないでしょうか。こういう問答のうまさは絶品といっていい。私も小楠の前に出て行くと、翻弄された末、つい丸めこまれてしまうんじゃないかと思います。だけれども騙されたように感じても嬉しいと感じるかもしれない。当時の福井の人は、小楠の話を聞いて、だんだん乗せられてしまったんじゃないでしょうか。中には心酔しすぎた人もいるようですけれども、そういうことができる人は世の中そう滅多にはいません。小楠はそれができたんですね。

３．松平春嶽の幕権掌握

Ａ．長州・薩摩による引出し・提携工作

さて、次はいよいよ福井藩が中央政界で重要な役割を果たすというところです。春嶽は文久２年（1862）に政界に復帰しました。復帰する前から、彼は正しいことをやって処罰されたのだ、いつか彼を引き出して一緒に仕事しよう、そういう人たちが日本国中にいました。その一人が長州の桂小五郎、のちの木戸孝允です。桂は文久元年の８月に藩邸にやってきて、長州と交易してほしいと申し込んでいます。この時、福井藩は体よくお引き取り願ったようですが、翌年の５月に春嶽が全面的に謹慎を解かれると、桂はまたやってきて、今度は将軍上洛をやろうと提案しています。毛利敬親（たかちか）が将軍上洛を幕府に建議していますが、それはもとは桂が考えたことです。この桂という人は、尊王攘夷の志士として知られていますが、視野が広くて、常に提携関係を拡げようと努力していました。元々は開国論者で、友人の吉田松陰が処刑されたため幕府に怒りをおぼえるようになり、さらに久坂玄瑞（くさかげんずい）に引きずられて攘夷論者になりましたが、のちには元に戻っています。

この時、幕府は京都から何かいってきそうだと察知して、先手を打ちます。春嶽の慎を緩めただけでなく、彼に政務参与を依頼しました。どうして春嶽か。とにかく天皇に開国論に変わってもらわなくてはいけないということで、長州の長井雅楽（うた）という人に頼んで朝廷を説得しようとしたのだけれど、拒絶されてしまった。長井だけでなくて、いろんな人に説得を頼もうとした。地位も高くて人気もある春嶽に行ってもらえば、なんとかなるかもしれない。そこで春嶽に使いを頼もうとしたんですが、春嶽は幕府が反省しない限り協力しないといって、にべもなく拒絶します。

それから薩摩も、以前から提携関係がありましたので、春嶽に目を付けていました。その薩摩の島津久光が、兵を率いて京都に入り、朝廷と交渉して、春嶽を大老に任命し、また一橋慶喜を将軍の後見に任命するというアイデアを認めてもらいました。そして、それを持って勅使と一緒に江戸にやってきます。春嶽には、あちこちから出てきて欲しい、頼みますという声がかかってきました。

Ｂ．文久２年の幕制改革

この年に幕府は大きな制度改革を試みます。春嶽はその改革と深いかかわりを持ちました。条約を結んだのち、幕府はアメリカに使節を送っています。そこで西洋を実際に見て、その結果、いまのままの軍備ではだめだ、海軍を中心に軍備を再建する必要があるということがわかり、徳川の長い平和の中で、事実上はなくなっていた軍隊をつくることを計画しました。そこで、文久２年の５月に将軍家茂自ら改革を宣言して、江戸時代の初めに復古すると述べました。軍事改革、財政改革、行政改革、それを同時にやるというのです。

この時は海軍が主で、陸軍が従だった。どうしてこの順かというと、要するに西洋に対する防御が主眼なので、国内が後回しになるのです。この時の計画は、まずは12隻の軍艦を使って、一組の艦隊をつくる。それを江戸と大坂に振り分けて日本の要所を防備するというものでした。これは短期計画です。そのお金はどこから出すかというと、幕府の中で節約、財務整理をする。それから貨幣を改鋳して水増しする。貿易がはじまってから大量の金貨が外国に流出していました。それを止めるためにいろいろ苦労したあげく、最後は日本国内の金貨を水増しして、金貨の質を下げることによって流出

を止めざるを得なくなった。そうすると、通貨が急膨張して急激なインフレが起きる。しかし、当面は幕府は金貨がいっぱい手に入るから、それが使えるということになりました。この第一期のあとには、なんと艦隊を15組つくって日本全国に配備することを考えた。これが長期計画です。こちらの資金はどこから出すかというと、大名に割り付ける。参勤交代を緩めることによって大名の財政を楽にさせる。しかしその分を幕府が運用する海軍に差出させる。幕府は損をしない。そういう計画でした。ただ、どうでしょう。１組12隻で15組。一体どれくらいの数の軍艦が必要になるのか。短期計画はともかく、なぜこんな巨大な海軍を作ろうと考えたのでしょうか。無謀な計画だったと思います。さすがに勝海舟なんかはわかっていて、こんなのできるか、やめちまえと主張して、この大計画は潰れました。しかし、これを潰すにあたって、春嶽は大きな役割を果たしています。

久光が勅使と一緒に江戸にやってきました。ところが、これが不評判になって江戸を去らざるを得なくなった。その帰りに生麦事件を起こしてしまうんですけれども、春嶽は久光が帰ったあとで、久光との約束を果たしました。それは、参勤交代を緩めることでした。薩摩には、春嶽や一橋慶喜を幕府の中枢に登用すると、参勤交代を緩和してもらえるという期待があった。薩摩だけでなく、他の大名も助かる。春嶽もそれをわかっていて、きちんと約束を果たした。その結果、幕府の軍制方が考えていた海軍の長期計画は実現できなくなりました。さらに春嶽は長州の主張にしたがって将軍上洛も決めてしまいます。将軍上洛には100万両以上のお金がかかりますので、短期計画も実現できなくなりました。幕府は、このあと輸送船数隻と軍艦２、３隻を買っただけで、それ以上増やすことはできませんでした。

というわけで、春嶽は幕府が困る決定を二つともやってしまった。でも、これは別に幕府を弱らせるためにやったわけじゃないのです。どうしてかというと「御上洛之御入費は信義と太平とを御買収に相成り候御用途。（中略）此義を被止、海軍を被起候も、此侭之御政体に而は外国は扨置、内乱足下に生じ、海軍は何之御用にも立申間布候」[11]、いま日本国内で起きている争乱は、安政五年の政変からはじまった。春嶽自身も被害者でしたけれども、大名たち、侍たちの中には、幕府に対して強い不信感がある。それで尊攘志士が京都に入り込んで、朝廷が大騒ぎするようなことになっている。だから幕府が自分のやったことは間違いでしたとはっきり謝罪する。そうすればいまの争乱を止めることができるはずだ。その謝罪のために、将軍自ら京都に出向く。和宮をお嫁さんにもらったお礼を口実にすれば、幕府の内部は説得できる。また謝罪するだけではなくて、この時に大名を招集して朝廷で会議をやる。まさに「公議」を京都でやって、そこで攘夷論を抑え、天皇に開国論に変わってもらう。天皇に開国論に変わってもらうには、どうしても幕府の方から間違いを正さなくてはいけない。これが春嶽の一貫した主張で、こうして日本の危機的状況を救い、さらに大胆な改革に向っていくということが目標でした。

11月になって、京都から二度目の勅使が江戸にやってきました。この時に二つの重要なことが決まっています。まず、幕府は朝廷の下にあるということを公式に認めました。それまで朝廷と幕府は、「両敬」という互いが対等に尊敬し合う関係で、その「両敬」をやめて、これからは常に朝廷が幕府の上にあるということを認めました。このことは、東久世通禧（みちとみ）の『竹亭回顧録』[12] に非常にうまく書いてあります。

それから、朝廷が要求した攘夷策を受け入れた。いつやるかとか、どういうふうにやるかは任せるという約束はとりつけたのですが、原則は承認してしまいました。これは幕府の側に弱みがあって、かって和宮をもらった時に７～８年、ないしは10年先に条約を元に戻しますという約束をしていたのです。秘密の約束です。幕府の中にもそれを知っている人はほとんどいなかったのですけれども、この年の４月か５月にそれがばれてしまった。となると、約束したんだから実行しろとなってしまう。幕府にはそういう弱みがあって、攘夷策を受け入れざるをえなくなった。「真綿で首をしめる」という諺がありますが、それがはじまった。

４．京都の困難・王政復古への飛躍

Ａ．京都での尊攘論の高揚（文久２・３年）

文久２・３年（1862･1863）という年は、京都で尊王攘夷論が昂じていって、果ては倒幕論まで登場することになります。それを加速したのが長州です。長州はそれまで開国論を唱えていたのですが、久坂の主導で条約を破棄して攘夷をやろうという、逆の破約攘夷論に転換しました。将軍上洛に先立って、総裁の春嶽、後見の一橋慶喜、当時は幕府の参与になっていた土佐の容堂、それから薩摩の久光、幕府のトップと有力な大名が京都に集まっていました。それなのに攘夷論を緩和することはできなかった。むしろいつやるのか決めろと逆に押し詰められてしまいます。これはちょっと信じがたい状況です。幕府のトップと有力な大名が集まっていながら、たかだか100人、多くても200人の攘夷志士たちをコントロールできない。異常なことが起きたのです。普通の政府だったら全員つかまえて終わり。あっという間に終わります。

Ｂ．春嶽、京都脱出

なぜ幕府はそれができなかったのか。安政の大獄の傷が大きかったためでしょう。だから幕府は追い詰められていって、攘夷の期限を約束せざるを得なくなった。そうなった時に春嶽は何をしたかというと、京都を脱出して帰国してしまった。朝廷に対しては、将軍と天皇の間で政策が分れているのはだめだ、一か所でまとめて出すようにしないといけないと主張し、将軍に政権を返上させるか、そうでなければ将軍に政権を全面委任しろという二者択一を要求した。しかし聞き入れられなかった。それで将軍に対しても、まず自分が総裁を辞めると決意し、将軍を京都に入る前の大津で迎えて、将軍を辞めた方がいいと進言した。これも聞き入れられなかった。そういうわけで、どうしようもなくなってしまったのです。

春嶽は前の年に幕政改革をやった時に、しょっちゅう辞職を申し出ていました。「辞める」といったら、幕府の老中や役人は慌てたのです。春嶽は朝廷の命令で政事総裁になっていました。その彼が辞めてしまったら朝廷に対して申し訳が立たない。そうすると、日本国中で批判が起きる。だから、幕府は立場上、春嶽を辞めさせる訳にはいかず、春嶽の言うことを聞かざるを得なかった。で、その時は効き目があった。ところが、朝廷に対してこれは効かない。「辞める」というと「辞めてしまいなさい」となる。どうして春嶽の側近がそのことに気が付かなかったのかわかりませんが、脅せば相手がいうこと聞くと思ったら全然効果がなかった。春嶽は３月の下旬に「辞めます」といって、その

まま許可をもらわずに帰国してしまいました。すると、正式に罷免されて、逼塞していろと命令されることになった。日本全国に対して恥をさらすことになってしまったのです。

この時、京都には、生麦事件の問題でイギリスが怒り、大坂の近くに軍艦を持ってきて直接脅しをかけるのではないかという噂が伝わってきていました。攘夷論を唱えていた人はこれを大歓迎します。春嶽は、こういう可能性が生じたら天皇や関白は譲歩してくれるだろうと思ったのですが、三条実美（さねとみ）や若い公家などは逆に喜んで、それこそ望んでいたことだ、いざ戦争だと、ブレーキが効かなくなったのです。

C.「国是」会議の提案

そこで、帰国した春嶽が何をしたか。これは放っておけない、なんとか将軍を助けてあげないといけないということで、中根を京都に行かせて、老中に「国是」会議を開くことを提案させました。日本全国から有力な大名を集める。さらに面白いのは、外国の代表も呼ぶ。そういう会議を提案したのです。そこできっちり議論をして、結果を出す。結果が和平でも戦争でも、開国でも鎖国でも、それは先に予定することではない。とにかく集まって議論しましょうという。相当な冒険ですが、福井で成功したことがある。小楠がいたらできたかもしれない。

それを実現させる方法が「挙藩上洛」です。春嶽だけじゃなくて、茂昭も一緒に先頭に立って、一説には約4000人の兵と一緒に大挙して京都に押し出す。ほとんど藩がもぬけの殻になるくらいの人数です。ただ、一藩だけでやると負ける可能性が高いので、協力してくれそうな加賀、熊本、薩摩と連携を図ります。このことも最初から視野に入れていました。

D. 王政復古論への飛躍・二つの王政復古の競合

挙藩上洛はこのあとがすごい。王政復古をやろうと言い出すのです。どうして王政復古かというと、「国是」会議をやる時に中心に立つべき人は誰か。それは徳川将軍その人です。それ以外にありえません。ところが、将軍の側近が将軍は江戸に帰るんだと言い出して、将軍は帰ってしまった。そうすると、「国是」会議を開いた時に将軍は京都にいない。困ったことです。そこで、５月下旬に大評定（だいひょうじょう）を開きます。何度も何度も繰り返しました。一応、挙藩上洛とは決めているようですが、しかし、京都で情勢を探っていた中根が帰ってきて、反対する。そこからまた激論が交わされることになる。

挙藩上洛で何をやるのか。一つは、前から主張していた「国是」会議をやることです。それからもう一つ、王政復古をやる。大事なのは、このタイミングで王政復古をやるということをはっきり言い出したことです。もう幕府の老中たちは当てにならない。将軍はいい人だが周りはどうにもならない。生麦事件の賠償金を勝手に払うとか、そうかと思えば外国に鎖港を申し込むとか、先ほどのように将軍を江戸に帰してしまうとか、一貫性がなく、無責任で全く頼りにならない。ここで、天皇の下に賢明な諸侯を集め、日本全国から人材を抜擢するという左内の構想、それをもっと大規模に実行することにした。幕府の役人を抜きにして政府を組織してしまおうという話にもっていった。

さあ、これはどうでしょう。春嶽はこれを受け入れられますか。徳川家の一員です。それが徳川を退けて王政復古をやってしまおうというのです。先ほどお話したように京都から帰ってきた中根は反

対します。中根は重臣たちと何回も議論をやりますが、結局負けてしまって、蟄居させられます。この時、藩主の茂昭は参勤の期日が来ていて、それを遅らせていました。参勤すべきか、それとも参勤しないで京都に押し出すか、そういう選択になっていた。そこで、参勤はしない、京都に押し出すという意見が通ってしまった。そして、挙藩上洛に備えて熊本や薩摩に家老の岡部豊後や三岡が出かけて、それぞれ合意をとりつけています。

この路線で進むことも、あるいは不可能ではなかったかもしれません。将軍をもう一度京都に呼び出すこともあり得たかもしれない。しかしながら京都では、全く別の、もう一つの王政復古が提唱されるようになっていました。久留米の神官真木和泉（まきいずみ）という人が長州に行って、この際、天皇が自ら攘夷の先頭に立つということを名目にして、その実は王政復古のための挙兵をやろうと提案していました。長州はこれに同意して、藩主の敬親が家老に攘夷親征の黒印状を交付して京都に出発させています。明らかに攘夷戦争に踏み切ろうと決意していた。こういうことがあって、8月に天皇が大和に行幸するということが布告され、それが実行されたら、返す刀で箱根まで兵を進める。こういう段取りになっていました。しかし、会津と薩摩が組んでカウンター・クーデタを起こし、成功しました。それに福井も荷担した。そこで攘夷親征の戦争はなくなって、攘夷親征のあとに考えられていた倒幕の挙兵もなくなりました。

この文久3年（1863）の夏というのは、非常におもしろくて、福井の中でも徳川抜きで王政復古してもいいというところまで議論が進んでいました。もちろん、親藩ですから徳川を完全に排除する気は誰にもなかった。けれども、一旦は徳川抜きでも構わない。そういう極論まで考えはじめたのですね。逆に朝廷では、いきなり倒幕挙兵をやってしまおうという方が優勢になる。京都も福井も狂躁状態というか、悪い言葉を使えば、集団的にみな発狂した状態になっていたのです。

この挙藩上洛、福井の「国是」会議と王政復古の構想は、熊本や薩摩が一緒なら、それほど無茶な行動ではなかったかもしれません。しかし、薩摩の返事は9月になったら出ていきますという悠長な話で、それでは到底、京都の倒幕論の急展開にはついていけない。ですから、この時は挙藩上洛をやらなくてよかったと思います。もしやっていたら自滅するだけで、何も達成できなかったでしょうし、あとでひどい目に遭わされたことでしょう。福井は実行できなかった。けれども、代わりに会津と薩摩がクーデタをやってくれたため、また目がひらけます。

その後

A.「公議」政体樹立の失敗（元治元年）

最後にその後の話を簡単に申し上げます。京都での急進派の動きはここでストップして、秩序を再建しようという話が立ちあがります。この時から、日本の政局は薩摩が主導することになります。薩摩の主導で、かねて問題になっていた公議政体をつくろうということになり、福井や土佐に働きかけて「朝議参与」までは実現しました。ところが「幕議参与」、左内が考えていたような大大名の政権参加を実現しようとしたら、その瞬間に会津と幕府の老中が敵にまわって、天皇を味方に引っ張り込んでこれをひっくり返しました。逆に、天皇と将軍が仲直りして、有力な大名を抜きにした公武合体の体制が成立します。長州を排除しただけでなく、薩摩も福井も排除する。朝廷と幕府は一緒になっ

たけれども、他に不安定要因をいっぱい作り出した。これが、この時の公武合体の体制です。

B．長州戦争：バイ・プレイヤーへ

そういった中で、長州は主役に戻ろうとして禁門の変を起こしました。それに失敗した結果、逆に今度は征討を受けることになってしまう。こうして長州が征討を受けることになった時に、薩摩の西郷は大名の会議を開いて長州の処分を決めようと主張し、大久保利通も翌年、条約の勅許を大名の会議で検討しようと、時々で一番注目される争点を使って公議政体をつくろうとした。しかし、これらはことごとく退けられる。退けたのは、徳川慶喜その人でした。この時代になると、福井はバイ・プレイヤーに変わっていました。

C．徳川慶喜の公議政体論転換と裏切り

しかし、長州戦争で幕府方が敗れます。敗れたので慶喜は心を入れ替えたのか、入れ替えた振りをしたのか、ここで一気に公議政体論に変わります。そうすると、頼りになるのは春嶽しかいない。そこで二人で相談しながら計画を進めたのですが、これがひっくり返る。ひっくり返したのは孝明天皇です。計画に呼応した公卿たちが列参して王政復古を主張したので、これに怒り心頭となって潰したのです。それで慶喜も公議政体はやめ、天皇と自分と二人で日本を仕切っていこうというふうに変わってしまった。

D．四侯会議の挫折

大政奉還というのは、実はこの１年前にできたはずなのです。けれどもいろんな事情があって、結局１年後になった。そのきっかけは四侯会議の挫折です。説得だけで慶喜を動かすことはできないとわかった時に、薩摩は軍事力の動員を考えはじめました。この軍事力の動員は挙兵ではありません。軍事力を見せておいて、いざとなったらやるぞと相手を脅す。そうやって慶喜の譲歩を引き出そうとしたのです。

E．徳川中心の王政復古へ

そうなった時に、それまで公議政体論に対して一貫して冷たかった土佐の容堂が、コロリと態度を変えました。公議政体なんて知らんといって、会議のたびにすぐ国元に帰っていたその容堂が、後藤象二郎の議事院をつくろうというアイデアを取上げて、奮闘をはじめます。

それで結局、最初にお話ししたように王政復古クーデタをやったのですが、その多数派は徳川方で、徳川排除をねらっていたのは薩摩だけでした。土佐が中心となって、それに福井と尾張も協力して、一旦は慶喜が議定に就任するということが認められたのですが、江戸の騒乱が大坂に波及して戦争になってしまいました。それで薩摩と長州が勝ってしまったので、もう徳川の権力はなくなったと、こういうことになりました。

F．鳥羽伏見後

その時に、容堂がまた重要な決断を下しました。それまで慶喜を擁護していた主役は容堂だったのですが、擁護をやめて新政府に残る、政府の中に入って薩長を牽制する。そういう方策に転じます。

この時、春嶽は容堂らと協力しながら宗家を救うこと、慶喜の命を救うことに一生懸命努力しました。そして、その後はかなりあとまで新政府の役職に就いております。これはちょっと大名の中では珍しいですね。他には容堂と宗城くらいです。薩摩や長州から見ても、春嶽は公平な人だった。だから、この人には新政府のメンバーになってもらおうと、こう思ったのだと思います。

注

1）橋本左内先生160回忌記念シンポジウム「橋本左内と明治維新」基調講演「橋本左内の未来構想～世界と日本を見つめて～」（平成30年５月27日、於ハピリンホール）。
2）三谷博『維新史再考　公議・王政から集権・脱身分化へ』（NHK 出版、2017年）。
3）「双頭」は「公儀」と「禁裏」、「連邦」の「邦」は「藩」。詳細は前掲注２第２章「双頭・連邦国家」参照。
4）大老井伊直弼が徳川斉昭・松平春嶽ら不時登城関係者を一斉処罰。
5）「横井小楠書状」（安政５年６月15日）『横井小楠関係史料　一』（復刻版　続日本史籍協会叢書、東京大学出版会、1977年）、257～258頁。読点は講師による（以下、史料引用中の読点は同じ）。
6）横井小楠「学校問答書」（嘉永５年３月）『横井小楠関係史料　一』、１頁。
7）仙波ひとみ「水戸人菊池為三郎と宇和島伊達家－為三郎来宇の経緯とその後の動向、家中への影響について－」明治維新史学会　第45回大会（平成27年６月13日、於位輪島市生涯学習センター大ホール）研究報告。
8）村田氏寿・佐々木千尋『続再夢記事』（復刻版　日本史籍協会叢書、東京大学出版会、1974年）。
9）『関西巡回記』（三秀舎、1940年）。
10）横井小楠「国是三論」（万延元年11月頃）『横井小楠関係史料　一』、29～56頁。
11）「松平慶永建議」（文久２年７月25日）『再夢紀事・丁卯日記』（復刻版　日本史籍協会叢書、東京大学出版会、1974年）、163～168頁。
12）東久世通禧述・高瀬真卿編『竹亭回顧録　維新前後』（復刻版　続日本史籍協会叢書、東京大学出版会、1982年）。

〔付記〕本稿は2018年（平成30）９月15日に、福井県立図書館多目的ホールで行なわれた講演会「『公議』運動における福井の役割－横井小楠を通じて」の講演録を加筆・修正したものです。